

第五に、基本的にはガレヌスを奉じていたヴェサリウスをおそらく最も苦めたと思われるのは「図説」の種々の新しい知見とその記載である。彼がその存在は聞き知っているが、いかにしても確認できなかった手掌短筋、腹直筋の起始停止、アブミ骨の存在等に関してはバルベルデの方が一歩先んじている。

ヴェサリウスの慎重さとバルベルデの進取の葛藤は、いわゆる「パラダイム」の転換期ならではといえようが、「図説」がミシェル・フーコーいうところの「まなざし」に通ずる「博物学的視座」を「遠近法美術」から解放した功績は大きく、当書の普及なくして後年のヴェサリウスの「再評価」もありえず、又、極東にエビゴネン（のエビゴネン）を生むこともなかったと考えられ、模倣が模倣を超越した稀有な例と思われる。

13) 関場不二彦の事蹟（1）

一開業初期の病院経営一

A Biography of Fujihiko Sekiba 1

Administration of his First private hospital

○吉田 信
島田 保久
津田 晴美
松木 明知

Nakato Yoshida et al.

関場不二彦は慶応元年（1865）会津若松で生まれ、明治22年（1889）帝国大学医科大学を卒業、医科大学第一医院の助手としてスクリパのもとで外科を研鑽、同25年9月公立札幌病院長に就任、翌26年札幌で開業した。業績として外科学では第6回日本外科学会総会での宿題報告、日本外科全書の分担執筆などあり、また医史学では「アイヌ医事談」、「西医学東漸史話」など多くの著書、論文を発表した。さらに札幌市医師会と北海道医師会の初代会長としても北海道の医事に貢献した。昭和14年（1939）逝去。昭和41年（1966）生誕百年記念の一つとして「関場理堂選集」が出版され

た。しかし今なお不明なことが多々あるのが現状である。

最近、関場自身の手になる「病院経営ニ関スル書類」と題する文書を発見した。その中には「病院沿革」など従来知られていなかった事実を物語る貴重な史料が入っており、それを紹介すると共に2、3の考察を加えたい。

これらの文書は縦32糎、横23.5糎の和紙の袋に入っており、中央に自署した題簽がはってある。その中の書類の一つが「病院沿革」で、16丁の和紙に明治26年10月15日から同33年12月までの病院に関する記録が書いてある。これによると、

明治26年10月15日南3条西6丁目11番地の自宅で開業、豊平村に出診所を設けた。医員は阿部元寿、外来は自宅に1日40人位、出診所は隔日午後阿部が診療、1回20人位であった。11月23日大通西4丁目6番地に移転、25日関場医院と改称した。改称とあるので開業当初は別の名称があったことになるが、医院名は不明である。12月守谷健之助が医員になった。

明治27年1月29日から2月18日まで上京した。

1月に宮地金吾が医員として勤務（4月古平病院長に転出）、4月加賀屋武留が医員として勤務（8月福山病院へ）した。なお1月看護婦長吉村良子とあり、初めて看護婦の名が出てくる。7月1日北海病院と改称、自著「我二十年」に院勢は非常な隆盛を極めたとある。この年の外来新患者5,203人であった。

明治28年1日院主となり病院設立の件を願い出て2月6日認可された。4月小樽診療所を設け、尾形碧を主任とした。同月三沢三代三郎が医員となった。この年の外来新患者は7,034人であった。

明治29年3月三沢が浦河村医となり、代わりに高林秀貞が医員となった（6月下旬小樽へ）。6月病院拡張の一環として病室7室（60名収容）が新築落成し、官民400人が集まり披露宴を挙げた。

明治30年3月24日病理解剖を行った。北海病院として初出の解剖記事である。6月診察室、医局、薬局、手術室、病室の新築を行った。8月医員助

手の渡辺貞佳（28年2月から勤務）が上京，済生学舎に入った。

明治31年1月13日医学士竹中成憲を院長とし，関場は29日上京，ドイツ遊学の途についた。留守中院務の紛争で4月28日竹中院長以下医員が辞職，5月3日医局は秀島孝副院長と外科助手の大久保武志だけとなり，7月10日北海病院を閉じた。11日名称を北辰病院とし，院長竹村鋲次郎医学士，医長大内小六で再開した。10月帰国。11月組織を改め，自ら院長兼外科主任となり，竹村を内科主任とした。12月北辰病院として初めて病理解剖を行った。

明治32年1月竹村内科主任が辞職，内科主任も兼務した。医員は大内小六，秀島孝，助手大久保武志。5月院主に父の忠武を迎え内部紛争が全くなかった。8月秀島を検梅駆梅の担当とした。9月助手の大久保武志を院費で済生学舎に入れた。10月浦河の渡辺貞佳を医員とし，大内が幾春別炭山医員になった。11月伊達紋別地方に赤痢流行，長佐古鏖太郎医員を道庁検疫委員として派遣した。

明治33年2月宮地良治が副院長になり，駆梅院と藤野出診所の管理者となった。9月駆梅院との関係を絶ったが，11月渡辺医員を仮駆梅院長とし，宮地副院長を本院勤務とした。

以上，北海道の医界の重鎮であり，文化人であった関場不二彦について，新資料を中心に文献的に考察を加えた。今後も資料の発掘に努めていきたい。

14) Anaesthesia の命名

The Naming of Anaesthesia

日本歯科大学新潟歯学部・医の博物館

中原 泉

Sen Nakahara

Anaesthesia の名称は，Oliver Wendell Holmes (1809—94) によって命名された，というのが定説とされている。しかし，この命名の由来やその内容に関しては，詳らかではない。

1846年10月15日，歯科医師 W.T.G. Morton (1819—68) は，ボストンのマサチューセッツ総合病院 (MGH) において，硫黄エーテルを用いて全身麻酔に成功した。

この新法の開発は，またたく間に全米に広まり，欧州に伝播した。12月10日はやくもロンドンで，歯科医師 James Robinson が抜歯手術に応用，21日には著名な外科医 Robert Liston が大腿部の切除手術に用いた。

このように欧米各地で Morton の無痛法の追試が相次ぐ前，公開手術から数えて36日後の11月21日，Holmes はボストンで1通の書簡を記し，Morton に送った。

文中，彼はエーテルによって生ずる無感覚の状態に，適切な名称をつけることを提案した。実に，Morton の無痛法が登場するまで，いわゆる“Anaesthesia 麻酔”という言葉はなかったのである。こうした定義を必要とする意識の喪失状態は，（それまで存在しなかったので）誰も知らなかったからだ。

Holmes は，MGH につとめる医師で，詩人としても知られていた。彼は Morton の公開手術に立会い，その麻酔施術を目撃し，彼の絶対的な支持者となった。そのとき Morton 27歳，Holmes は37歳であった。

やがて中傷と誹謗の渦中に陥った Morton を，彼は私心なく心情をこめて，次のように擁護した。

「その効果の可能性にかかるアイデアを受け入れられなくても，Morton 博士は勇気と不屈の努力をもって，彼の評価を賭して最初の決定的な実験を断行したことは，全く反論の余地のない周知の事実である。

その結果に辿りつくまで，世界は何世紀もあるいは限りなく待たされたのかもしれないのだ。Morton 博士はその発見によって利益を得るかわりに，それに捧げた労苦と時間の結果として，彼の心と身体，そして財産に痛手をこうむったことはよく知られている。

私は Morton 博士ととくに関係はないし，主義や意見のうえからも，私に偏見をもたせるような